

16世紀初頭にはじめてドイツ語で書かれた 世界最初の歯科啓蒙書について（その4）

—Zene Artzney—『歯のおくすり』の和訳（3）*

森 山 徳 長**

前報に引続き第7～13章を訳出する。

第7章 黄色い歯、黒い歯について

ラテン語の“Limositas”〈沈着物〉というのは、白っぽいものや、黄色または黒いどろどろしたものが、歯の下の方や歯ぐきの上にくっついたもので、酒石〈Weynsteyn、英訳では Tartar〉と呼ばれることもあります。

こういう黄色や黒い歯は、はちみつなどの甘いものや、脂っぽい食物をとることで起ります。歯を白くしておきたい人は、はちみつなどをやめることと、食べすぎてそのまますぐ寝てはいけません。とくに、きのこ類やその他の野菜を、ライ麦、大麦やその他の果物と一緒に調理したものがいけません。

外見の自然できれいな歯は、軽石〈ラテン語では spuma maris〉や、食塩のように、よごれをこすりとり、きれいにする働きのある薬を使うことによって、保つことができます。もし歯が汚れてしまっているとしても、そうすることで、もとにもどすことができます。

歯を白くする粉をつくるには次のようにしま

す。まず野生の紋首草を霜や雪で白くなった時に採り、すりつぶし、はちみつをまぜて小さなケーキのようにします。あまり熱すぎないストーブでよく乾燥し、それを5ドラムとり、軽石と食塩を各1.5ドラム、臙脂虫〈coccus cacti の雄虫〉末を2ドラム、アロエ末1ドラムを加え、よくまぜて、その粉末で歯をこするとよい。

もうひとつのつくり方は、絹を食塩と一緒にもやしできた粉末を利用するのです。黒くなってしまった歯の場合は、まず器具を用いてよく汚れをひっかいて落してから、次の処方の歯磨剤を作ります。

1) ばら1分、五倍子 1/4 分、没薬1分をまぜ、よくひいて粉末にする。

2) よく焼いた硫黄と軽石各ドラム、食塩7ドラムをまぜてよく挽く。

3) 生卵のからを、内側の薄い皮をよくはがしてよく乾燥させる。それに練瓦を加え、全部をすりつぶしてなるべく細かく粉末にする。それを使う時には、スプーンにとり、ぶどう酒か酢を少し入れてそれで歯をこすり、そのあとぶどう酒で口をゆすぎ、次に水でよくゆすぐ。

4) 万年老の花梗を焼いて炭化したものをよくすりつぶす。それを絹かその他のものに含ませて歯の表面をこする。これは歯を白くし、また虫も除去できます。

もうひとつ黒い歯をきれいにし、ゆるんだ歯をしっかりとせ、口に良い香りを与える良い処方

* Popular Dental Book Written for the First Time by its Native German Language in 16-Century Europe (Part 4) Translation of Zene Artzney (3)

** Norinaga MORIYAMA, Tokyo Dental College 東京歯科大学

本稿要旨は、本学会第167回例会（1986年6月27日於モリタ・ホール）で口演した。

5) 焼いた明ばん半オンス、粗製酒石酸と赤さんご各2ドラムづつ軽石2.5ドラム、それに万年老の炭化物、焼いた糸杉の幹、白檀、サルココーラ〈sarco-colla〉それぞれ1ドラムをよく挽き、それで歯をこする。

(注) この章は、今日でいうペリオの原因・療法、歯磨剤の作り方を述べている。ローマ時代に一部貴族等の用いた歯磨剤よりも、いく分進歩して、種類も多くなっている。しかし病因論は液体学説を踏襲しているので、あまり方法も変りばえしていない。

しかし一般市民も、そろそろ口腔衛生に興味を持ち、そうした需要があるので、この様に過去の文献をあさり、また当時使用されていたものを列記したものと思われる。

第8章 いわゆる眠っている歯について

ラテン語の“Dormitatis”〈睡眠〉は歯の病気のひとつです。それは、わたしたちが手や足がよく寐ているというように、歯が寐ているように感ずるのです。これは、雪や氷、または冷水のように、非常に冷い物を口に含んだときに起ります。

その治療には、良いぶどう酒1ポンドに、万年老、しそ、かみつれの花をそれぞれ1/2にぎりづつ、それに丁字、にくづく〈肉豆蔻〉を1/2ドラムづつ入れ、1/3の量に煮つめる。その熱い液を口に含み、そのあと口をゆすぐ。あるいは、丁字、しょうが、肉づく、こしょう、各々の少々づつを指一本の長さぐらいの袋に入れて、半時間熱いぶどう酒で浸出する。そして、眠ったような感じの歯の上にその袋をのせるのです。

(注) 6章とはちがい、歯の麻痺感、挺挙感をいうのではないと思われる。

第9章 ゆるい歯

ラテン語の“Dentium commotis”〈動揺する歯〉は、歯がゆるくなり、まだ若いのに抜けそうになる病気をいいます。それは、歯肉の手入れをおこたったり、歯肉が弱いか、病気になった時に起ります。あるいはまた、歯をそれぞれの場処に支え

ている物質が離れてしまう場合に起るのです。その場合とは、頭部の体液が下りて来て、歯根や歯肉に悪い作用を仕かけて、歯をゆるめてしまうのです。

胃の病気が原因で起ることもあります。その時には、胃から体液が上ってきて、歯肉をいためるのです。

この病気に対しては、Mesueがいうように、3つの方法で薬を使います。

1) 第1は、先ず頭からの体液や、胃から上ってくる蒸気を、すっかり追放しなくてはなりません。それには、体液の性質や量によって適当な薬を使うのですが、この場合、頭をきれいにする丸薬か、散薬で充分でしょう。

2) 第2は、歯を支える血管と歯肉を乾かすために、体液を消耗させる薬、例えば香料、ペトリウム、にんにくを酢で煮た液や、直接酢を口に含むか、ウマ、アングタ草やそのたぐいのものを酢で煮たものなどがよい。

3) 第3の方法は、歯肉を乾かして体液を取り去る薬を応用するのですが、主として乳香をかむことと、それから、ばらとざくろの花を煮て、その液で口を洗いゆすぐのです。しかし歯がゆるんで抜けかかったり、〈対合する歯と〉ぶつかったりするようになって、どうしても固定が必要なきには、しっかりした健康な歯に、絹糸か金の針金で結びつけます。そして、やわらかい軽い食物と、抜けるのを防ぐためにコルネリウス・ケルズスがすすめた薬を使うのがよいのです。

それらは、1) 熱した五倍子をとかしたぶどう酒を口に含むこと。あるいは、2) 五倍子1オンス、没薬2オンス、ざくろの樹皮とグラデオラスの球根のそれぞれ1ドラムをまぜ、酢で煮て、それで口をゆすいだり、歯肉になすりこんだりする。3) 香料と阿片チンキをまぜて歯肉につける。4) 鹿骨を焼いた灰で歯をこする。それは鹿の骨の削りくずでも同じ効果がある。5) 水で煮たオリーブも、歯のゆるみを固くする。また、むしろにも効果がある。6) 五倍子、樫の実の皮、明ばん、ざくろの樹皮を等量とり、よく挽いて粉末にする。これで朝晩、歯と唇の間をこすると、

歯をしっかりとさせるのに役立つ。7) ばら、未熟なプラム、未熟なぶどうを天日で乾かし、粉末にして、はちみつを混ぜてゆるんだ歯につける。8) 阿片チンキと乳香を、粉末にした甘草と一緒にし、よく混ぜて歯の上にぬりひろげると、ゆるみを止めることができる。

それから或る人は

9) 歯の両面の歯肉をやきごてで少し焼き、その部分の上をはちみつで覆う。そして口をはちみつ酒でちょいちょいゆすぎ、その場処が〈潰瘍〉でうづきはじめたら、体液を乾かし冷たくする薬を用いるのです。けれども、この焼灼手術は危険で、上手な費用の高い先生を必要とします。

(注) ここでも液体学説にもとづいた古来の経験的生薬が用いられる。また、焼灼もよく行われたことがわかる。

第10章 歯の虫

歯の虫を退治するには、ひよす、にらと玉ねぎの種を採って酢でよく煮て、口の中に含み、それでよく口内をゆすぎます。

それからこれらの種をとり出して、一緒に挽いて粉末にします。それに腎臓ぐらいの大きさの脂肉をまぜ、そら豆ぐらいの大きさの丸薬に作ります。それを炭火の上にのせ、漏斗をかぶせて、煙が悪い歯に行くようにしてやります。そうするとこれが歯の虫を殺してしまいます。

別の方法は、緑青を少しとって2倍位のはちみつでよく練ってそれを歯にぬり拡げます。

第3番目には、アロエの粉末を歯にふりかけ、虫を殺す薬とする方法もあります。

(注) ローマ時代からよく行われた燻煙法は、この時代にも引続き行われていたらしい。(4章でも述べられた。)

第11章 潰瘍、口臭と歯肉病

もし歯肉に潰瘍ができはじめたら、それを上手に指で押して、押し出してしまわなければなりません。もしそういう風にできない時は、その目的

に合うように作った細かい鋭い鉤で、潰瘍をかき出し、不潔を取去ってしましましょう。そのあとでは、酢か、またははちみつとしそを入れてよく煮たぶどう酒で、しょっちゅう口をゆすがなくてはなりません。もし歯肉が悪い臭いを出すようになった時は、肉桂、丁字や白色香料でもって、歯をこするとよいのです。

しかし、歯肉が腐敗するようだったら、明バン1/2 オンス、はちみつ1 オンスをよくまぜて歯肉の上にぬり拡げなさい。あるいは、にらと酢と甘草の汁をまぜて、口の中に含みます。そうすれば歯は強くなり、歯肉の腐敗も消えます。

ところで、腐敗がとてもひどいときは、先ず下剤をかけ、体を清めることをすすめます。それから、歯肉の腐敗を指先で押し出して、新しい健康な歯肉が成長するまで、海葱と *liticum* を酢で浸出した液で処置しましょう。もしも、腐敗が歯の根の深い所にまで行っているようだったら、そして清掃するととても痛いようだったら、まずバラ油、卵白や牛乳などで痛みを和げましょう。それから、灼熱した銅、鉄または金の焼きゴテで潰瘍を焼きとります。そしてその傷あとには、バラ油をまぜたバターを塗ります。そして肉が上ってくるように、エジプト軟膏 *<unguentum egyptiacum>* をつけて、完全に治るのを助けてやります。

(注) この章では、アフタ、潰瘍性口内炎、歯槽膿瘍(急性発作)などの療法を述べているが、最後は焼灼法によっている。

第12章 わるい歯の抜きかた

どうやっても歯痛がしずまらない時は、ほかの歯にも被害が及ばないように、最後の手段として、その悪い歯を抜いてしまわねばなりません。しかしその手術は、十分に経験を積んだ先生にやってもらふべきです。何故ならば、無分別に歯を抜くことは、大きな損傷を起し易いからです。

そういうわけですから、抜歯は一番痛みの激しい時に行ってはなりません。少し痛みが和らぎはじめた時が良いのです。

先生 *<Maestro>* は、歯と一緒に歯肉をいため

たり、歯痛以外の別の病気を起さないように、細い道具で歯肉をひきはなします。そのようにして、歯肉をできるだけ充分に歯からはなしてから、歯を前後に動かして大きくゆるませて、注意深く、ゆっくりと抜きとります。そうするのは、時や経験の浅い人が、とくに上の歯を抜くときに、まちがいを起すように、顎骨を骨折したり、破壊したり、脱臼したりしないためです。不注意な抜き方をすると、眼にまで損傷が起るような危険があります。

歯がうつろになっているときには、鉗子ではさんだ時に割れないように、最初に鉛、錫、銀、鉄などやそのほか適当なものをつめておきます。歯はまっすぐに引き抜かなければなりません。歯根が折れたり、顎の骨をいためたりしないように、片側だけに折りまげて抜いてはいけません。

歯が抜けたならば、骨の破片があるかないか、よくさわって確かめ、もし少しでも何か残っていたら、注意して、上手に取りのぞきます。もしそういうときに、歯肉がかぶっていて見えなければ、もし少し歯肉を切り取って、どんなことがあっても必ず骨の破片を取り去らなければなりません。

顎骨の骨折や、一部の破壊が起ったかどうかを判断するためのしるしは、歯を抜いた穴からの出血が、ふつうの場合よりも多くなることです。そして顎がひどく腫れて口が開きにくくなり、抜いた穴が化膿して腫れます。もしどこにも損傷が起らなかったならば、五倍子かざくろの花を酢の中で煮た液を、冷やして口に含みます。それでも痛みがとれない時には、バラ油の中で乳香を煮て、口に含ませると、よい結果が得られます。

抜歯をこわがる人には、悪い歯を焼灼する方法があって、それは次のように行います。先ず適当な細い鉄を熱して冷えた鉄の筒に入れ、先の方へ熱い鉄棒を少し出して、悪い歯を焼くのです。歯に空洞があれば、赤熱した鉄の先をそこへ突込みます。この焼灼は非常に良い方法で、痛みをしづめるだけでなく、歯の一部分が少しづつ、痛むことなしにかけて、抜け落ちて行きます。

或る場合には、鉄の代りに、木の実の核か反魂香の小さなかたまりを、熱して、歯の空洞に入れ

てもよいのです。あるいはまた、緑の蛙の脂肉を歯に貼るのも良い方法です。そうすれば歯が細かく割れて、順番に無痛的に抜け落ちます。

(注) Maestro は、理髪外科医同業組合の親方、すなわち徒弟を教える資格のある指導者を指す。当時は、抜歯は医師でなく Barber surgeon によってしか行われなかった。また抜歯の被害をこうむることが多かったので、焼灼法で患者の恐怖を除こうとした風潮がわかる。

第13章 歯を長持ちさせる方法

良い歯を持っている人は、以前に第2章でも述べたようなことを、注意深く守らなければいけません。

朝起きたならばまずはじめに、歯の外側と内側を、粗い麻布でそれぞれの歯を1、2回づつよくこすって、きれいにします。この粗布で歯をこする方法は、歯と歯肉を強くし、清潔を保ち、ムシバを防ぎます。

このあとで、

1) 食塩を少しとり、同じように歯をこすります。そうすれば、彼は歯を白く、新鮮に、丈夫に、健全に保つことができます。

あるいは、

2) 塩とはちみつをまぜて鍋にとり、焼いて粉末にして、それで歯をこする。

3) 没薬と明バンを細かい粉末にしてそれで歯をこする。

4) 焼いた明バンを酢でといて歯をこする。

5) 没薬をぶどう酒で煮てそれで口をゆすぐ。この方法は、歯を強化し、また、歯肉をへらさないために、それから悪臭が出ないようにし、体液〈humor〉をとり除きます。

最後に、

6) 食後にはいつもぶどう酒かビールで口をゆすいで、歯のまわりにくっついて、ムシバを起させ、口を臭くし、歯をだめにしてしまうものを、全部洗いしてしまうのがよいのです。

(注) この頃の一般市民は未だ歯ブラシを使う習慣

がなかった。しかし歯痛に悩まされることも多かった
ので、口腔衛生に関心が向けられた。1548 年の Ryff

の本格的歯科医学書も、口腔衛生の注意に力点を置いて書かれている。
(以上・完)